九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(3)

高山, 倫明

https://doi.org/10.15017/2559331

出版情報：文學研究. 97, pp.41-60, 2000-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解（三）

高山倫明

本誌九六輯の前稿につづき、清代の日本研究書『吾妻鏡補』（翁広平著、嘉慶十九・一八一四年序）の「国語解」に引用された「海外奇談」の読解を試みる。今回は「人物類」である。凡例・文献等は前稿を参照していただきたい。

五、試解（承前）

人物類

0209「男」倭多古（おとこ）　A：オトコ　B：オトコ
0210「女」倭難古（おなご）　A：オナゴ　B：オナゴ
0211「君子」裩式（くんし）　A：クンシ　B：クンシ
読みは「くんし」でまちがいあるまいが、音注「裩」字（魂韻見母）は他に例がない。
0212「小人」沙人（しょうじん）　A：ショウジン　B：ショウジン
見出し語には、『訳通類略』「小人　自称」、『俗語解』「小人　ソレガシ　ワタクシ」、などに見られるような意味もあ

るが、ここは前項「君子」に対する「小人物」の意であろう。音注「沙」字（麻韻生母）は、0115「長崎　南加沙几」（ながさき）、0379「杜鵑　沙之其」（さつき）、0459「糖　沙糖」（さとう）のように／サ／を写すのにふさわしいが、0291「総管　沙代」の「そうだい（惣代）」のような例もある。音注「人」字（真韻日母）には0256「客人　却笑人」（【笑→苦】きゃくじん）、0288「唐人　拖人」（とうじん）、0298「別人　別志人」（べつじん）等。ここはとりあえず「しょうじん」と解しておく。

0213「善人」揺介倪（よか■？）　A：ヨカ？　B：ヨカ●

音注の「揺介」の部分については1043「好　揺介」の例もあり、「よか」でよかろう。『長崎方言集』には「ヨカヤツ　美人。ベッピン。」という語形が見える。「倪」字の例はここと0116「人　倪」（？）、次項0214「悪人　阿蠱（倪？）」（あくにん？）のみ。3例を同時に説明できる案がない。→0116「人　倪」参照。

0214「悪人」阿蠱（倪？）（あくにん）　A：ワルイ？　B：ワルイ●？　《駒上：阿蠱倪》

底本に損傷（擦り消し？）があり、音注の「倪」字は判然としないが、終画らしいものは見える。音注は「阿蠱倪」とみてよかろう。校本B「覚え書き」には

「音注「阿蟲倪」の「倪」→116。本書の解読は校本に従い「ワルイ□？」としたが、「オコ□？（嗚乎）」とするのも一案。」

とある。同書は「蠱」字を「蟲」字に誤刻している。「蠱」は他に例がない。姥韻見母で「古」と同音、みだら・わざわい等の意をもち、表語的な使用と思われる。ここは「あくにん」でよかろう。前項、0116「人　倪」、0128「瞎　密瞽辣」（めくら）等参照。

0215「獃」阿火（あほう）　A：アホウ、阿呆　B：アホウ

見出し語「獃」字は「呆」に同じで、「呆子」は、まぬけ・あほう・ばかなどの意。『訳通類略』「獃子　バカモノ」、『支那小説字解』「獃子　アホウ」。

0216「無情人」　那撒几捺（なさけな－い）衣　A：ナサキナイ　B：ナサキナイ　《駒上：捺▽那》

音注「几」字は、0002「晴　天几要加」（てんきよか）、0115「長崎　南加沙几」（ながさき）、0624「柴　几」（き）、0656「斧　學几」（よき）のように／キ／を写すと同時に、0421「竹管　可搭几」（こだけ）、0461「酒　篩几」（さけ）、0605

「酒壷　篩几瓶」（さけびん）、0765「杌坐　可式揩几」（こしかけ）、1004「亮　阿夾力／郁阿几」（あかるい、よあけ）のように／ケ／に該当するかと思われる例も少なくない。0009「風」の項参照。ここは「なさけ」と解しておく。

0217「浮頭　施　約古太衣那（やくたいな－し）　A：ヤクタイナシ　B：ヤクタイナシ

見出し語は表面・うわべの意。『長崎県方言辞典』「やくてむなか　ばかばかしい。むだな。無益な。東彼杵－東彼杵。大村市旧市内」。

0218「聰明（聡明）」由豁之（【由→里】りはつ（利発））　A：●　B：ユカシ？

校本B「覚え書き」に

「「聰明」の音注「由豁之」を一往「ユカシ？」と訓じたが、或いは「ヨワシ」かも知れぬ。」

とあるが、「之」字は／シ／にはあたらず、また「ゆかし」も「よわし」も見出し語からは距離がある。ここは「由」字を「里」の誤写とみて「りはつ」と解したい。0167「臀　失里」（しり）、0310「鶏　妥里」（とり）、0411「百合　又里」（ゆり）／0113「橋　豁失」（はし）、0647「箱　豁古」（はこ）、0808「糊　豁六」（はる）／0377「山茶　之抜其」（つばき）、0379「杜鵑　沙之其」（さつき）、0569「索　之納」（つな）等々参照。『南山考講記』「聡明人　ハツメイナ人」、『唐音世語』「聡明（ソウミン）　カシコイ」、『訳通類略』「聡明伶俐的　リコウモノ」、『怯里馬赤』「伶俐　リハツ　カシコイ」、『支那小説字解』「伶俐　リハツモノ」。

0219「伶俐」立可捺（りこうな）　A：リコナ　B：リコナ

見出し語は賢い・利口であるの意。『訳通類略』「聡明伶俐的　リコウモノ」。

0220「誠實」日之那（じつな～じちな）　A：ジチナ、実な　B：ジチナ

『日葡辞書』「Iichina mono. 1.Iichina fito. ジチナモノ．または，ジチナヒト．（実な者．または，実な人．）重厚で素直で誠実な人．」、『南山考講記』「篤実的（トジテ）　ジツナモノ」。

0221「刻薄」拖約古納（どうよくな）　A：ドヨクナ、胴欲な　B：ドヨクナ

見出し語はむごくて情が薄いの意。0153「没良心　徒學戈捺」（どうよくな）の例があり、『南山俗語考』巻一に「没良心（ムリヤサイン）　ドウヨクナ」とある。ここも「どうよくな」が適当かと思われるが、音注「約」字は、0217「浮頭　約古太衣那施」（やくたいなし）、0381「芍薬　刹戈約戈」（しゃくやく）、0503「大花綢　烏抜皮刹約」（おおとびさや）、1035

「破　約蒲力搭」（やぶれた）のように／ヤ／にあたるのが普通。0235「乾娘　約式那客」、0250「乾兒　約式及戈」が、解釈によっては／ヨ／を写したことになるが、なお存疑。

0222「忠直」麦司古那（ますぐな）　A：マスグナ　B：マスグナ

見出し語は忠実で正直であるの意。1027「直　麦司古那」（ますぐな）に全く同じ音注がある。

0223「忠厚」也非多（えーひと）　A：エヒト、善い人　B：エヒト

見出し語は真心があって情が厚いの意。『南山考講記』「忠厚人　忠セツナ人」、『長崎県方言辞典』「ええ　いい。良い。「おいどがような貧乏人はといも（甘藷）が一番エエとじゃ」対馬―厳原町豆酘。平戸市中野」。

0224「正經（正経）」　搭搭司一非（ただしい■―六　―■）　A：【六→大】タダシイヒト　B：【同】タダシイヒト

見出し語は正しい、まじめな、まともなの意。『南山考講記』に「正經人（チンキンヂン）　タゞシイ人」とあり、ここも「ただしいひと」である可能性が高いが、音注「六」字が問題。「大」に改めてもやはり／ト／には適さない。音注「司」字は0222「忠直　麦司古那」（ますぐな）、0141「搓手　帖司六」（てする）、0265「讀書人　揩谷蒙司六非多」（がくもんするひと）、0268「道士　揩納司」（かんぬし）、0349「鹿　客奴司司」（かのしし）、0406「菓子　卦司」（くわし）等々のように／ス／／シ／の両方にあたる。

0225「大量」哭哭奴福的（こころふて？）　A：ココノフテ、心の太い　B：ココろノフテ

見出し語は度量の大きなさまを言う。「奴」字で／ロ／を写したか。0151「小心　哭哭奴福司該」（こころほそか？）の項参照。

0226「家主」談談動（だんなんどん）　A：ダンダドン、旦那どん？　B：ダンダドン

見出し語は一家の長、戸主の意。『浜荻』「だんなん　亭主」、『長崎方言集覧』「ダンナンサマ　旦那様。主人を云ふ。」「ダンナンサン　旦那さん。（一）他人の妻に対してその夫。（二）妾をもてる男。（三）芸妓などの馴染客ダンナとも云ふ。」、『長崎県方言辞典』「だんなんどん　地主。島原市杉谷。南高来―吾妻町山田・有明町湯江・千々岩」。なお、『長崎県方言辞典』「だんだ　①旦那。良家の主人。五島―三井楽。②ぼっちゃん。五島―上五島」のような記述もあり、「だんだんどん」のような語形があった可能性もある。

0227「堂客」烏揩（おか■？）　A：オカ（ク）、お客　B：オカく　《駒：「一本揩作楷」》

校本B「覚え書き」は

「「オカク」（お客）。底・駒・駒一の三本ともに「ク」に該当する音注漢字を脱せり。」

とするが、見出し語は女性・ご婦人・妻君の意。長崎関係の方言書の類には母の意の「おか」「おかか」「おかく」のような語が見られ、転じて「夫が自分の妻を呼ぶ語」（『長崎県方言辞典』「おかか」の項）にもなる。これらであればオッカ・オカヵのような音声形を写した可能性もあり、音注の脱落を考えずともすみそうであるが、見出し語と語感が一致しないように思う。音注の脱落を想定するのであれば、母（かか）系よりも、お方様系の「おかっさま　奥さん。おかみさん。島原市。南高来―有家・加津佐」「おかしゃま　商家の内儀（おかみさん）を使用人たちの呼ぶ語。大村市。長崎市」（『長崎県方言辞典』）の方が妥当か。いずれにせよ存疑。

0228「長輩」挨捺搭（あなた）　A：アナタ　B：アナタ

0229「平輩」紅毛淫（おまえ～おまい）　A：オマヨ、お前　B：オマヨ　《駒：「一本作並」》

見出し語は同輩の者の意。0300「你」にもまったく同じ音注がある。本書には1043「好　揺介」（よか）の「揺」や、0873「是　篩遥」（さよう）の「遥」のように、「舀」を音符として／ヨ／／ヨウ／を写す音訳漢字がある。校本A・Bはここの音注「淫」字をその類と解したらしいが、これは「淫」の譌字で、侵韻以母の字。侵韻影母の「音」（0852「寄音之几」いつき）や、他の侵韻の音訳漢字「欽」（0263「皇帝　欽立山馬」きんりさま）、「金」（0638「荷包　金雀戈」きんちゃく）、「心」（0660「剪燭煤　心起力」しんきり）、「林」（0271「老鴇　雅林丁」やりて）等の例から推せば、ここは「おまい」か、または／エ／の口蓋性を踏まえたうえで「おまえ」と理解するのが適当であろう。『長崎県方言辞典』「おまい　①お前。君。あなた。佐世保市。佐世保対早岐。西彼杵―時津・野母崎・多良見。諫早市。北高来―高来町小江。②夫が妻を呼ぶ語。北松浦―吉井」。

ところで、0031「辰」太子（たつ）、0267「和尚」蓬山（ぼんさん）、0314「魚翅」非力（ひれ）等のように、見出し語と意味の適合はないものの、音注が既存の単語になっている例は少なくない。ここの音注の「紅毛」の部分はもちろんオランダ人の意で『明史』和蘭伝等に見えるもの。長崎においては常に中国がオランダに対して貿易的優位を占めていたとはいえ、バタヴィアの東インド会社を拠点として強力な武力を背景に東アジアでの多角貿易を展開するオランダが、中国の貿易商人にとって商敵であったことは言うまでもない。「紅毛」と「淫」との組合わせは作意的であると言えようか。

0230「祖」直壽山（じじさん）　A：ヂヂサン　B：ヂヂサン

音注「直」字は孤例だが、唐音資料に「ジ・ジツ・ヂツ」のような仮名表記が見える。音注「壽」字は0720「十一壽一枝」（じゅういち）、0721「十二　壽二」（じゅうに）のように「じゅう」に当たる例が多いが、0906「送你　聖壽麦收」（しんじましょ）、0907「奉送　聖壽馬里【里→思】」（しんじます）のように「じ」と解されそうな例もある。現代九州方言に広くみられる「～しゃん（様・さん）」からすると、音注「山」字は「さん」ではなく「しゃん」かもしれない（『長崎県方言辞典』「しゃん　人名等に付けて親愛と敬意を示す「さん」の音変化。「太郎シャン・花子シャン・おばシャン」」）が、同じ生母の音訳漢字が広く／サ／を写している点も考慮する必要がある。「沙」（0115「長崎　南加沙几」ながさき）、「殺」（0287「捜子　殺戈利」さぐり）、「晒」（0296「小工厮　晒婆羅同」さぶろどん）、「刹」0382「櫻桃　刹古拉」さくら）等。ちなみに「九州ではサシスセソがシャシシュシェショに訛る」といった俗説があるが、／セ／の口蓋性を除けばあとは少数の単語レベルの問題にすぎない。ここは「じじさん」でよかろう。

0231「祖母」排排山（ばばさん）　A：ババサン　B：ババサン

『筑紫紀行』に「祖母を　ばんばさん」、『壺蘆圃雑記』に「ば、あを　ばんば」、『長崎県方言辞典』に「ばんばさん　祖母。老婆。おばあさん。五島。北松浦－生月（ババン併）」などとあり、「ばんばさん」の可能性もある。

0232「父」駝駝山（ととさん）　A：トトサン　B：トトサン

0233「令尊」屋也治山馬（おやじさま）　A：オヤヂサマ　B：オヤヂサマ

見出し語は人の父を呼ぶときの敬称。ご尊父様・お父上。『唐話為文箋』「令尊（リンツサン）　ゴシンプサマ」、『支那小説字解』「乾爺　ヲヤジサマ　但他人ノ父ヲ云フ」「老官児　オヤジサマ」。

0234「母」揩揩山（かかさん）　A：カカサン　B：カカサン

『支那小説字解』「娘々　カ、サン」（この「娘々」は母親の意）、『壺蘆圃雑記』「か、様を　かくさん」。『長崎方言集』「カクサン　母。自分の母をいう（卑称）」「カカサン　一般母親の意に用いる」。

0235「乾娘」約式那客（やしない■？）　A：ヨウシナカ、養子仲？、乾娘は養母　B：ヨウシナカ

「乾～」は義理の関係をいい、見出し語は義母・養母の意。『爾言解』「乾娘　他人ノ婆〇又カリノハ、ヲヤ」、『南山考講記』「乾娘（カンニヤン）　母分」などの例がある。音注「約式」は後出の0250「乾兒　約式及戈」の前半と同語であろう。先の0221「刻薄　拖約古納」が「どうよくな」であれば、ここの音注「約式」も校本A・Bのように「養子」である可能性も

あるが、そこで述べたようにやや疑問が残るうえ、「ようしなか（養子仲）」という語も裏付けがない。「約式」を素直に読めば「やし」であり、次の「那」字をあわせ考えるならば「やしない（養い）」の語が浮ぶ。『日葡辞書』「Yaxinaigo 養子とした子」「Yaxinaivoya　誰かを養子にしている父や母」、『唐話纂要』「養父（ヤンウ）　ヤシナヒチヽ」「養母（ヤンモウ）　ヤシナヒハヽ」等。「やしないかか」のような語があったか。もっとも、これも裏付けのない語ではある。0250「乾兒　約式及戈」も参照。

0236「伯父」文聚山（おんじさん）　A：オンジユサン　B：オンジュサン

音注「文」「聚」字は他に例がない。「おんじゅ」なる語も裏付けがない。『長崎方言集』「オンジー　叔伯父。年老いたる下男にもいう」、『長崎県方言辞典』「おんじしゃん　①伯父・叔父さん。西彼杵－時津」。「おんじ」か「おんじー」かのいずれかであろう。

0237「夫」丁頂山（■）　A：【頂→須】テイシユサン、亭主さん　B：【同】テイシュサン

「丁」字の例は他には0271「老鴉　雅林丁」（やりて）、0912「久仰　甲丁馬失搭」（■）のみ。「頂」は他に例がなく、「須」に改めてもやはり例がない。『長崎方言集』「テース　亭主」「ゴテース　御亭主」、『長崎県方言辞典』「てえす　夫。主人。人妻が自分の夫を他人にいう語」。

0238「新郎」花那木古同（はなむこどん）　A：ハナムコドン　B：ハナムコドン

『唐話纂要』「新郎（スインラン）　ハナムコ」、『長崎方言集』「ハナムコドン　花婿」。

0239「妻」烏甲山（おかっさん）　A：オカサン　B：オカサン

『長崎県方言辞典』「おかっさま　奥さん。おかみさん。島原市。南高来－有家・加津佐」「おかっつぁま　①商家の内儀を尊敬した語。お方様の音変化。奥様。平戸市。長崎市（オカッファン併）。他家の細君。奥さん。島原半島全域。」「おかしゃま　商家の内儀（おかみさん）を使用人たちの呼ぶ語。大村市。長崎市。」、『長崎方言集』「オカシャマ　母。又は小母」「オカサマ　他人の母にいう、オトサマに対す」。「おかっさん」か「おかさん」かは決めがたいが、『長崎歳時記』「オカツサン」、司馬江漢『西遊旅譚』「をかつさん」、『筑紫紀行』「人の妻を　おかつさん」とあるのに従っておく。

0240「新娘」花那右米戈（はなよめご）　A：ハナヨメゴ　B：ハナヨメゴ　《駒上：音注ナシ》

見出し語は花嫁の意。『唐話纂要』「新郎（スインラン）　ハナムコ　新娘（スインニヤン）　ハナヨメ」、『長崎方言集』「ハナオカッファン・ハナヨ

メゴ・ハナヨメジョ　花嫁」、『長崎県方言辞典』「はなよめご　花嫁。長崎市（ハナヨメジョ併）。島原半島大部分。」

0241「妾」貼客（てかけ？）　A：テカ（ケ）？　B：テカけ

音注「貼」字は他に例がないが、同じ帖韻透母の「帖」字が6例あり、0140「手　帖」（て）、0141「搓手　帖司六」（てする）のようにいずれも／テ／にあたる。『唐話纂要』「小妾（スヤウツヱ）　テカケ」、『長崎方言集』「テカケ　妾」、『長崎県方言辞典』「てかけ　めかけ。妾。長崎市。俗語的な共通語」。

0242「兄」白布山（ばぼうさん）　A：●　B：バボウサン

校本B「覚え書き」に

「「兄」の音注「白布山」（簡要103も同文）は九州方言で「バボウサン」。」

とある。『長崎歳時記』「兄をさして　ばぼうさん」、『筑紫方言』「兄を　長崎にてハ　ばぼうと云」、『壺蘆圃雑記』「兄を　ばぼう　梅木唐音梅木（ばいも）の訛也梅は諸木の兄といふに基く」、『筑紫紀行』「兄を　はぼう」、『長崎万歳』「ばぼふさん　梅木（ばぼう）」。『長崎方言集覧』「バボウ　伯父」、『長崎県方言辞典』「ばぼお〔バボ・バボオ〕　①兄。兄さん。または、男の使用人」。音注「白」字は他に0187「饞唾　雌白其」（つばき）、0467「烟　太白戈」（たばこ）などの例があり、暮韻幫母の「布」字はここにしか現れないが、暮韻並母の「歩」字に0775「叫　遐歩」（よぶ）、0875「公　欠歩」（けんぽう）のような例がある。

0243「嫂」有名果（よめご）　A：ヨメゴ　B：ヨメゴ

見出し語は兄嫁または既婚女性に対する尊称。ここは「よめご」でよいかと思うが、音注「名」「果」は他に例がない。後者については声調違いの「過」字に0089「後日　描過日子」（みょうごにち）、0560「過船　平過子」（【子→于】びんこい）、0772「去　一過」（いく）のような例がある。『長崎方言集』「ヨメゴ　嫁御」、『長崎県方言辞典』「よめご　妻。嫁さん。「ヨメゴ持つ」（妻を迎える）「おるがヨメゴ」（私の妻）五島－小値賀・上五島・若松・岐宿。福江市上大津。北高来－高来町小江。南高来－有家。島原半島大部分」。

0244「弟」烏多多（おとーと）　A：オトト　B：オトト

校本A・Bはオトトとする。音注からは「おとと」か「おとーと」かは決し難い。『長崎県方言辞典』に「おとと　弟。島原半島大部分」といった記述もあるが、本書に0232「父　駝駝山」（ととさん）の例があり、『長崎方言集』「オトート　弟」「オトト（児）　父様。自分の父にいう。今多くオトッツァンに改る。」、『長崎方言集覧』「オトト　父。下流の

もの、用ふる言葉。」、『長崎県方言辞典』「おとと　お父さん。自分の父に対する呼称。壱岐。五島－小値賀。北松浦－生月・小佐々。佐世保市（オトッチャン併）。佐世保市早岐。長崎市。」のような記述を勘案すると、父の意の「おとと」が当時あった可能性もあり、ここは「おと－と」と解しておく。

0245「姉」矮寧山（あねさん）　A：オネサン、姨は姉の誤りか　B：オネサン　《駒上：姉∨姨》

見出し字は「姉」字の正字。音注「矮」「寧」字はともに他に例がない。校本A・Bともにここをオネサンとするが、「矮」字は蟹韻字であり、本書には他に0079「初七　奶吶甲」（なぬか）の「奶」（蟹韻泥母）、0118「癩痢頭　蟹其」（はげ）の「蟹」（蟹韻匣母）、0983「細　科買」（こまい）の「買」（蟹韻明母）のような例があって、いずれもア段音を写している。ここは「あねさん」でよかろう。『長崎方言集覧』「アネシャマ　姉様。（一）姉。（二）長上の女（三）芸者屋などの女将。」、『長崎方言集』「アネシャマ　姉様。一般「姉」の意にもいう」、『長崎県方言辞典』「あねしゃま　お姉さん。長崎市（もと旧い商家で使用）」「あねしゃん　姉さん。壱岐－勝本。北松浦－吉井。西彼杵－野母崎。南高来－深江」。

0246「妹」梅（■）　A：メエ　B：メエ

音注「梅」字は他に0052「中秋　梅及子」（めいげつ）、0373「梅　呸梅」（うめ）、0474「甜　亜梅」（あめえ）等。「妹」字の唐音語でもあったか。存疑。

0247「姉妹夫」挨宜木戈（あねむこ？）　A：アネムコ　B：アネムコ　《駒上：夫∨人、戈∨古》

見出し語の「姉妹夫」なる語は未確認。音注を素直に読んで「あねむこ」だとすれば、見出し語は「姉夫」でありたいところ。『南山考講記』「姉夫（ツウフウ）　アネムコ」「妹夫（ムイフウ）　イモトムコ」、『唐話纂要』「姉夫（ツッフイフウ）　ア子ムコ　妹夫　イモトムコ　連襟（レンキン）　アヒムコ」、『崎港聞見録』「妯夫　ア子ムコ　妹夫（ムイフウ）　ヲトムコ／イモトムコ　連襟（レンキン）　アイムコ」等。もともと「姉夫」と「妹夫」がともに立項されていたのが落ちたか。ところで、『唐話纂要』『崎港聞見録』の「連襟」は、姉妹の夫どうしの関係をいう語。「姉妹夫」がこれと同類の語であるとすれば、そこにある「あいむこ」が期待される語ということになるが、音注「宜」字の用法には合わない。0041「西　宜施」（にし）、0686「貨　宜木子」（にもつ）、0633「戒指　由皮揩宜」（ゆびがね）、0683「千里鏡　吐美客宜」（とおめがね）等。

0248「兒」木士哥（むすこ）　A：ムスコ　B：ムスコ

音注「哥」字は他に例がない。歌韻見母で同音の「歌」字が0600「做詩　世之歌六」（しつくる）に見えるがこれも孤

例。声調と声母が少し違うが「可」字（哿韻溪母）は／ク／または／コ／の常用字である。「むすこ」でよかろう。『南山考講記』「兒子（ルーツウ）　ムスコ」。

0249「女」木士米（むすめ）　A：ムスメ　B：ムスメ

0250「乾兒」約式及戈（【及→乃】やしないご）　A：ヨウシ、ギコ？、養子、義子　B：ヨウシ　ギコ

見出し語は養子の意。『南山考講記』「乾兒子（カンル、ツウ）　子分」。先の0235「乾娘　約式那客」の項で述べたように音注「約式」を「ようし」とするのはやや疑問が残る。0235の音注「那」字にあわせて「及」を「乃」に改めれば、ここは「やしないご」と解せそうである。音訳漢字「乃」には0129「鼻　哈乃」（はな）、0337「海鰻　烏乃其」（うなぎ）、1046「齷齪　乞殺乃」（きさない）のような例がある。また、0543「間壁　吐及衣」は【及→乃】で「とない（隣）」の可能性が高く、誤写の類例となる。

0251「壻」木戈同（むこどん）　A：ムコドン　B：ムコドン

「壻」は「婿」字の異体字。『長崎方言集』「ムコドン　婿」、『長崎県方言辞典』「むこどん　相手の夫、または、第三者の夫を言う際の呼び方。長崎市。島原半島大部分。南高来―小浜・深江」。

0252「孫」有迷受（■）　A：ヨメジョ　B：ヨメジョ

音注を素直に読めば「よめじょ」となりそうだが、見出し語にあわない。前項との関連からすれば、見出し語の方が誤っているのかもしれない。『長崎方言集』「ヨメジョ　嫁」、『長崎県方言辞典』「よめじょ　嫁。お嫁さん。五島―奈留。長崎市。一般的」。

0253「外孫」麻姑受（まごじょ）　A：マゴジョ　B：マゴジョ

音注「姑」は他に例がないが、声調のみ異にする「古」字（姥韻見母）には0209「男　倭多古」（おとこ）、0210「女　倭難古」（おなご）、0005「日食　業叔古」（にっしょく）、0733「講價　業古密」（ねぐみ）のような例がある。音注「受」には0166「小尻　迷迷受」（めめじょ）、0254「丈人丈母　首陀受」（しゅうとじょ）、0272「婊子　太有／受六施」（たゆう／じょろし）、0273「好婊子　式馬抜拉哦受」（しまばらごじょ）のような例がある。ここは「まごじょ」でよかろう。

0254「丈人丈母」首陀受（しゅうとじょ）　A：シユウトジョ　B：シュウトジョ　《駒上：音注ナシ》

見出し語は、妻の父および妻の母の意。『長崎方言集』「シュートジョ　姑」、『長崎県方言辞典』「しゅうとじょ　しゅうとめさん。姑さん。長崎市。南高来―瑞穂町（伊古・古部）・国見町神代」。「丈人」（妻の父）の方の音注を欠いてい

るようにも見えるが、『長崎県方言辞典』「しゅっじょ　①しゅうとめ。姑。島原市安中。南高来－吾妻町守山・千々石。②しゅうと。舅。南高来－南有馬。シュッジョン　舅殿の意。南高来－有家」によれば、この音注で示された語には丈人の方の意味もあった可能性がある。『長崎県方言辞典』「じょ　女性の名また名詞につける接尾辞。親愛・敬愛の意を示す。」「じょお　人を呼ぶ時の接尾辞。さん。敬意を表す。「姉ジョオ（お姉さま）」「おじきジョオ（おじさん）」」参照。『長崎方言集』には「ムスメジョ　息女」「ゴゴ　ゴゴサマ　ゴゴジョ　ゴゴシャマ　娘御。他の娘に対する敬称」「ヨメジョ　嫁」「ハナヨメジョ　花嫁」「シュートジョ　姑」といった女性に関する用例とともに「ムスコジョ　息子」「ムコジョ　婿」なども見えている。

0255「舅」娘舅山（■）　A：●　B：●シウトサン

音注「娘」「舅」はともに他に例がない。校本Bは音訳漢字「舅」を訓読したのであろうか。いずれにせよ不審な音注である。ところで、「舅」字には母方の兄弟の意があり、「娘舅」の字面も『漢語方言詞匯』によれば蘇州と福州で同義の語となる。前項の見出しが「丈人丈母」のように対になっているところからすると、ここも本来は「舅・娘舅」のような見出しに「～山」の音注があったのが、音注が脱落して見出しの後半部が音注に紛れたのかもしれない。

0256「客人」却笑人（【笑→哭】きゃくじん？）　A：【笑→苦】キャクジン　B：【同】キャクジン

「却」字は他には0930「不公道　烏却戈」（■）があるのみ、「笑」字は他に例がない。「苦」よりは「哭」字の方が字形が近そうである。0523「黒　哭六格」（くろか）、0531「栗色　哭力」（くり）等。

0257「媒人」歛撿台式（■）　A：●　B：●

見出し語は媒酌人・仲人、また、口入屋。音注「歛」「撿」字はともに他に例がなく、「台」字には0608「茶托　査台」（ちゃだい）、0661「燭筌　速吉台」（【吉→古】そくだい）の例がある。

0258「夥計」那加馬（なかま）　A：ナカマ　B：ナカマ

見出し語は商家などの手代から転じて仲間・友人に対する愛称。『訳官雑字簿』「夥計　ナカマ」。

0259「帮間」太衣古馬積（たいこもち）　A：タイコモチ　B：タイコモチ　《駒：太＞大》

見出し語「帮」字は「幇」の俗字で幇に同じ。幇間。たいこもち。音注「積」字は他に例がないが、唐音資料にチイ・チツのような仮名書き例がある。

0260「小厮」沙婆羅（さぶろう）　A：●　B：サブロ　《駒上：厮＞厠》

校本B「覚え書き」に

「本書は音注「沙婆羅」を「サブロウ」と試読。」

とある。見出し語は雑役に使われた未成年の男子。召し使い。小僧。『南山考講記』「小厮　デッチ」、『俗語解』『應氏六帖』『支那小説字解』等に「小厮　コモノ」、『唐音和解』「小厮（シヤウスウ）　金剛」、『筑紫紀行』「召使をばさぶろうといふ」、『長崎紀聞』「三郎トハ　ボクナリ」、『長崎方言集覧』「サブロー　侍る。さぶらふ、と云ふ意味を有するものか。唐船の召使。筑紫紀行に唐船の召使をサブロウと云ふとあるが、これは「侍る」「さぶらふ」「さむらふ」と云ふ意味を有し、唐音の言葉でなく、邦語であると考へたい」などとある。0296「小工厮」も参照。

0261「使女」哭式木獨（こしもと）　A：コシモト　B：コシモト

『爾言解』「使女出身　コシモトノナリタチ」

0262「戯小旦」華盖施（わかいし）　A：ワカイシ　B：ワカイシ

「戯旦」「小旦」で役者の女形、おやまの意。『崎港聞見録』「小旦（シヤウタン）　風流ノ體妾婢等ニ　ー　ー　若女ガタナリ」、『劇語審訳』「小旦　振袖小共ノ役ナリ」。

0263「皇帝」欽立山馬（きんりさま）　A：キンリサマ、禁裏様　B：キンリサマ

「欽」字は他に例がない。見出し語にあわせた表語的用法であろう。同じ侵韻溪母の字はないが、侵韻見母の「金」（0579「大秤　金條」きんりょう、0638「荷包　金雀戈」きんちゃく、等）、同じく「今」（0163「卵袋　今搭姆」きんたま）がある。『唐音和解』「皇帝（ワンテイ）禁中（キンチウ）」。

0264「做官的」代一妙（だいみょう）　A：ダイミヤウ、大名　B：ダイミャウ

見出し語は役人の意。音注「妙」字は他に0056「明年　妙年」（みょうねん）、0784「替代　妙代」（みょうだい）などがある。『爾言解』「做公的　公ギノヤク人　同心ノルイ」。

0265「讀書人」　措谷蒙司（がくもんすー　六非多　ーるひと）　A：ガクモンスルヒト　B：ガクモンスルヒト　《駒上：人ナシ、駒：措谷＞楷客、上：谷＞客》

0266「醫生」一謔同（いしゃどん）　A：イシヤドン　B：イシャドン

『南山考講記』「醫生（イ、スエン）　イシヤ」、『長崎方言集』「イシャドン　医者」。

0267「和尚」蓬山（ほんさん）　A：ボンサン　B：ボンサン

「蓬」字は他には1019「半　立蓬」（【立→化？】はんぶん？）があるのみ。『南山考講記』「和尚（ホウジヤン）　ボウズ」、『長崎方言集』「ボンサン　坊さん、僧侶」。

0268「道士」揩納司（かんぬし）　A：カノシ、神主　B：カノシ

見出し語は道教の僧・方士の意だが、あえて日本語に置きかえるならば「かんぬし」か「やまぶし」になるのであろう。『唐話纂要』「道士也有許多　山ブシモ亦アマタアリ」、『唐音世語』「道士（タウス）　カンヌシ」、『南山考講記』「道師（ダウスウ）　ヤマブシ」、『両国訳通』「道士（タウス）　カンヌシノ亠　山伏ノ亠」。「納」字は0363「花　花納」（はな）、0569「索　之納」（つな）のように用例のほとんどが／ナ／にあたるが、0087「戌　應納」（いぬ）のような例もある。いちおう「かんぬし」と解しておくが、あるいは「かんのし」であるかもしれない。『長崎方言集』「カンノシ　神主、神職」、『長崎県方言辞典』「かんのし　かんぬし。神主。長崎市」。

0269「尼姑」比丘尼（びくに）　A：ピクニ　B：ビクニ

見出し語は尼僧の意。校本Aのピは誤植か。『南山考講記』「尼姑（ニイクウ）　アマ　比丘尼（ビイキウニイ）　ビクニ」。この音注は表語的になっていて、「比」字は他に例がない。

0270「烏龜」孔茲華洞（くつわどん）　A：クツワドン、廓どん？　B：クツワドン

見出し語は妓家の主人、または、妻を寝取られた夫をあざけっていう語。『南山考講記』「烏鬼（ウクイ）　クツワ　忘八（ワンバ）　クツワ」、『崎港聞見録』「忘八（ワンバア）　遊女ノ家主　クツワ　烏龜目（ウクイモ）　同上　龜鴇（クイヤウ）　同上」。

0271「老鴇」雅林丁（やりて）　A：ヤリテ、遣手婆　B：ヤリテ

見出し語は年老いた妓女・売春婦の意。ここは遊女の斡旋・監視等を役目とする年配女をいう。『崎港聞見録』「鴇児（マウルウ）　ヤリテ也　老杉板（ラウサンバン）トモ　老鴇（ラウマウ）　同上」、『支那小説字解』「鴇子　ヤリテ」。

0272「婊子」　太有（たゆう）　A：タユウ、太夫　B：タユウ

受六施（じょろし）　A：ジョロシ、女郎衆　B：ジョロシ　《駒上：太▽大》

見出し語は娼婦・倡妓の意。『唐商売往来』「遊女　婊子」、『南山考講記』「婊子　ケイセイ」、『長崎方言集』「ジョロシ　女郎衆、娼妓」「タヨシ　太夫衆、娼妓」。

0273「好婊子」　式馬抜拉（しまばら－
　　哦受　　－ごじょ）　A：シマバラゴジョ、島原御女　B：シマバラゴジョ　《駒上：子ナシ》
　前項との対比で、「好」がつくと長崎の丸山よりも京の島原の遊女ということになるのであろうか。「哦」は他に0137「身體　哦太」（ごたい）、0340「大花蛤　法麦哦里」（はまぐり）など、「受」は他に0166「小尻　迷迷受」（めめじょ）、0253「外孫　麻姑受」（まごじょ）などがある。『長崎県方言辞典』「ごじょむきゃ　婚礼。御女（嫁）迎えの音変化。五島－小値賀」。

0274「婊子使」　揩婆羅（かぶろ）　A：カブロ、禿　B：カブロ
　見出し語は遊女に随って身の回りの世話をする少女のこと。『崎港聞見録』「姣婢（キャウヒイ）　カフロナリ　少杉板（シヤウサンバン）　同上」。

0275「乞丐」　下毛婆式同（やまぶしどん）　A：ヤマブシドン、山伏どん　B：ヤマブシドン
　見出し語は乞食。「婆」字は0260「小厮　沙婆羅」（さぶろう）、0274「婊子使　揩婆羅」（かぶろ）のように／ブ／にあたるが、0165「尻　婆婆」（ぼぼ）の例もあり、「やまぼしどん」の可能性もある。『長崎方言集』「ヤマボシ　山伏」、『長崎県方言辞典』「やまぼし　山伏。長崎市。ヤマブシ又は山法師の音変化」。

0276「賊」　魚四多（ぬすと？）　A：ヌスト、盗人　B：ヌスト
　音注「魚」字は他に例がなく、同音字もない。魚韻見母「居」の0178「氣　一居」（いき）、魚韻暁母「虚」の0493「包袱　虚拉失几」（ひらしき？）、語韻昌母「處」の0208「性命　一拿處」（いのち）等からすれば魚韻疑母の「魚」で／ヌ／はいささか苦しいが、音注「四多」は問題なく「スト」と読めるので、ここはとりあえず「ぬすと」と解しておく。『長崎方言集覧』「ヌスト　盗人。ぬすびと。」、『長崎方言集』「ヌストオードモン　盗人横道者」「ヌストモン　盗品」、『長崎県方言辞典』「ぬすと　ぬすびと。盗人。五島。」「ぬすとおおどもん　横道者より更に悪い意をこめて人をののしる語。長崎市」。

0277「王家」　首麻山（■）　A：●　B：●サン
　清人汪鵬の『袖海編』に「有使院秩視二千石自日本都会奉使而来…操権極重故通称曰王家」とあり、見出し語は来航唐人の間では長崎奉行を意味した。『長崎古今集覧』「御奉行　王家」、『崎港聞見録』「王上（ワンジヤン）　奉行所　王家　奉行所」、『南山考講記』「王家（ワンキヤア）　ショコウノ〇」、『南山俗語考』「王家（ワンキヤア）　諸侯」等々。また、『訳通類略』に「王家　トノ」とあり、『唐通事会所日録』にも奉行を「殿様」と記した例が散見される。「ぶぎょうさま」「とのさま」のような語形が期待され

るところであるが、このままでは読めない。

0278「大頭目」　了見式（【了→可】ごけんし）　A：●　B：●シ
　　壽公山（■）　A：●　B：●サン

萩原義雄氏「吾妻鏡補所載海外奇談国語解の語彙について」（『渡辺三男博士古稀記念日中語文交渉史論叢』、昭和五十四年四月）は、音注の「了」字を「子」に改め、

　『訳通類略』に「頭目　コケンシ」とあって、右の音注漢字「子見式」と一致する。これは令制にいう固関使（コゲンシ）のことかと思うが、左の音注漢字については不明である。」

とする。「了」字を改訂したうえで「一致する」というのは不審であり、また、「子」字が訓読になっているのも従えない。見出し語は、『南山考講記』に「大頭目（ダアアウモ）　ヲモヤクニン　小頭目（スヤウアウモ）　コヤクニン」とあるように、ここでは上級役人の意（次項も参照）。『訳通類略』の「コケンシ」は、『唐通事会所日録』その他の貿易関係文献に散見される「御検使」、すなわち商取引を監視する奉行所の役人のことである。『長崎古今集覧』に「御検使　大頭目」、『崎港聞見録』に「大頭目　上ケンシ　小頭目　下ケンシ」とある。したがって音注「見式」はこの「けんし（検使）」に相違あるまい。問題は「了」字で、このままでは「ごけんし（御検使）」とは読めず、「じょうけんし（上検使）」も苦しい。「了」（篠韻来母）は他に2例みられるが、いずれも確例ではなく、類音の音訳漢字もない。0685「掃帚　了其」（【了→ウ·】ほうき）、0825「扎緊　乞了科」（【了→子ウ·】きつく）。ここはとりあえず「可」あたりの誤りと考え、「ごけんし」と解しておく（「个」字ということも考えられるがこれも他に例がない）。

　左側の音注「壽公山」はよくわからない。「壽」字は、0720「十一　壽一枝」（じゅういち）、0721「十二　壽二」（じゅうに）、あるいは0230「祖　直壽山」（じじさん）、0906「送你　聖壽麦收」（しんじましょ）のような例がある。「公」字は他に例がないが、東韻見母で同音の「工」字に0293「舵工　代工山」（たいこんさん）、0433「蘿蔔　代工」（だいこん）、0520「黄　和工」（うこん）といった例がある。素直に読めば「じゅこんさん」のような語になりそうだが。

0279「小頭目」屋戈迷失（おくみしゅう）　A：ヤクメシ、役目衆　B：ヤクメシ

　校本A・Bは音訳漢字「屋」字を訓読か。「屋」字は0150「費心　屋式娃」（おせわ）、0233「令尊　屋也治山馬」（おやじさま）のごとく／オ／にあたる。見出し語は小親分・小役人の意。ここは長崎奉行配下の役人に該当するようで、『南山考講記』に「大頭目（ダアアウモ）　ヲモヤクニン　小頭目（スヤウアウモ）　コヤクニン」、『長崎古今集覧』に「諸組ノ役人　小頭目」など

とある。一方、『通航一覧』『唐人番日記』等の記録類には諸組の役人に対する敬称として「御組」の語がしばしば現われる。この音注は「御組衆」であろう。

0280「年行司」年求（■）　A：●　B：ネンギヤウじ

見出し語は一年交代で勤める役の意。『日葡辞書』「Nenguiõji. ネンギャウジ（年行事）Toxino cotouo voconõ yacu.（年の事を行ふ役）一年の間つとめる役人：」。音注「求」字は他には0588「對賬　査一求」（■）のみで尤韻群母の同音字もない。声母が異なるが0581「稱秤　揩丘」（かきゅう）の「丘」（溪母）、0792「稱　揩邱」（かきゅう）の「邱」（溪母）のような例からすれば「ねんぎゅう」のような形が期待されるが。存疑。

0281「高木公」撒戈夜門（さくえもん）　A：サクエモン　町年寄高木氏に数代作右衛門がある　B：サクエモン

見出し語は長崎の地役人高木作衛門のことで、一六二九年没の初代作衛門忠雄以来、江戸時代を通じて代々襲名している。『崎港聞見録』「王家　奉行所　土王（ドウワン）　高木作衛門」。「夜」字は他には0092「昨夜　前夜」（ぜんや）、1017「賤　夜酥」（やすい）のみ。

0282「街官」烏多那（おとな）　A：オトナ、乙名　B：オトナ　《駒上：烏＞馬》

見出し語は市街を巡視する官吏の意。当時の長崎にあっては乙名（おとな）がそれに近い。『南山考講記』「舊（ギウ）街官（キイクハン）　フルマチヲトナ」「新（スイン）街官（キイクハン）　シンマチヲトナ」、『筑紫方言』「名主（なぬし）　庄屋（しやうや）　長崎にて　乙名（おとな）」、『長崎方言集覧』「オトナ　乙名。往時長崎の各町にはその町の総取締りの役を勤むる役人がゐた。之を乙名といふ」。

0283「街財副」　拉　　ら）　A：クニガシラ、組頭　B：クニガシラ　《駒上：失＞宜「一本夾作失」》

唐人屋敷に詰めて館内の管理・取り締まりを行なう唐人屋敷乙名の助役に組頭（くみがしら）があった。見出し語と直接につながる確証がないが、おそらくこの組頭が該当するのであろう。『崎港聞見録』「五甲頭　クミガシラ、街財副　町筆者」、『應氏六帖』「子将（クミカシラ）、曹長（クミカシラ）」。

0284「通事」知自（つうず）　A：ツウジ　B：ツウジ

音注「知」字は他に0505「緜綢　知母其」（つむぎ）の1例がある。「自」字は他に例がないが、右の「知」字や、「月姿基」（つき）、「爪　子米」（つめ）、「硯　四事禮」（すずり）の「姿」「子」「四」「事」などと同じ止摂開口の歯頭音字であり、ここは「つうじ」よりは「つうず」の可能性の方が高い。『日葡辞書』「Tçuzu.l,tçuji. ツゥズ．または，ツゥジ

（通時）、通訳」、『サントスの御作業』巻二「Iosephmo vazato tçuzu nite voxeidasaretariqereba,…」、『伴天連記』「其後ツフツ伴天連と云人を使にして…」、『蜆縮涼鼓集』「香水　奇瑞　好事　通事」、『倭訓栞』「つうず　通事の音也日本紀にをさめとよめり唐山にてとんすいの音に呼り」、『長崎方言集』「ツーズ　通事。唐人通事役」「ツーズ　（通事）特に唐人通事にいう。」、『長崎方言集覧』「ツウズ（通事）　長崎にて唐通事をツウズまたはツウズさんと称した。今猶ほツウズと云ふ言葉は一部分の長崎市民間に行はれてゐる」。0548「公堂上去　子字非雅一過」（つうずへやいこ）参照。

0285「夫頭」　非玉夾失拉（ひようかしら）　A：ヒヨカシラ　日傭頭　B：ヒヨカシラ
希遐夾施（ひようかし？）　A：ヒヨカシ（ラ）　B：ヒヨカシら　《駒上：玉＞王》
見出し語は人夫の頭の意。ここは日雇い人足の頭をいう「ひようがしら」（日用頭・日傭頭）であろう。『世間胸算用』「請取普請の日用がしら」、『崎港聞見録』「夫頭　ヒヨウカシラ」、『訳通類略』「小工　ヒヨウ」、『長崎県方言辞典』「ひゆう　日傭ヒヨウの音変化。日雇い。五島－小値賀。」「ひゆうとり　日傭とり。日雇い人。壱岐。五島－小値賀。北松浦－福島。西彼杵－野母崎。島原半島大部分」。左側の音注は同語を示したものか。音注「遐」字は麻韻匣母字で、他には0775「叫　遐歩」（よぶ）の1例がある。

0286「守番」吸雅子几（へやつき）　A：●　B：●ヤツキ
『崎港聞見録』に「守番　ヘヤツキ」、『訳家必備』に「守番　部屋附」、『長崎古今集覧』に「部屋附　守番」、『長崎歳時記』に、
「入港の唐人とも上陸の日より館内水汲下働きとして唐人屋敷乙名のかたより壱人、唐人番より壱人、宿町より壱人都合三人つゝ、右船の帰帆まで唐館へ遣し置、一船毎に右の如し、是を通俗部屋付と唱ふ」
などとある。音注「吸」字は緝韻暁母の字で、他に用例はなく、同音の字もない。

0287「捜子」殺戈利（さぐり）　A：サグリ、探番　B：サグリ
唐人屋敷の門の番所に詰めて、出入りの者のふところ等を探る役職を探番（さぐり）と称した。『崎港聞見録』「捜子サグリ」、『唐商売往来』「探」。

0288「唐人」拖人（とうじん）　A：トウジン　B：トウジン
『訳詞統譜』の鄭永寧の跋に「我慶安以降三江ノ商船人ヲ南京ト呼シハ猶是明人ガ自称シテ未ダ清民タラザル意ヲ示スナリ、唐人ハ唐王聿鍵ノ唐ヲ取テ福建及台湾船人ヲ呼ブ号ニシテ仍ホ是明人ナル意ヲ示スニ外ナラズ」とある。また、

漢民族を唐人と称するのは広州方言という記述もある。王育徳「中国の方言」（『中国文化叢書1　言語』所収）に「唐文化の広東地方に与えた影響のいかに大きかったかは、広州方言で、「中国人」を「唐人」、「中国語」を「唐話」、「中華料理」を「唐菜」などとよぶことからもでもうかがえる」とある。

0289「船主」仙都山（せんどさん）　A：センドサン、船頭さん　B：センドサン

以下、唐船役者（乗組員）の呼称がつづく。『増補華夷通商考』「船主　船頭ナリ船中ニテ役ナシ日本ニテ商賣ノ下知ヲシ公儀ヲ勤メ一船ノ人數ヲ治ム船頭ニ二種アリ荷物ノ主人則船頭ト成テ来ルモアリ又荷物ノ主ハ不レ来手代親類船頭ト成テ来ルモアリ」、『唐商売往来』「船頭　船主」、『南山考講記』「船主　センシュ」「洋船主　ヲキセンドウ　正船主　ホンセンドウ　副船主　ワキセンドウ」。

0290「財副」　才副山（つぁいふさん）　A：サイフサン　B：サイフサン

客山子几（■）　A：カサンツキ　B：カサンツキ

見出し語は唐船乗組員のうちの書記・経理のこと。『増補華夷通商考』「財附　荷物商賣諸事ノ日記算用ヲ主トル役ナリ」、『唐商売往来』「財副は筆者にて逗留中の諸賬目に係る」、『崎港聞見録』「財副　ヒッシャ」「街財副　町筆者」。音注右側の「才副」はこの「財副」であろう。音注「才」字は他に例がないが、従母なので、0077「初五　一慈甲」（いつか）の「慈」、0127「聲子　存朋」（つんぽ）の「存」などと同様、破擦音の日本語音に該当するはず。近世唐音資料でも「才」字にはサイ・ヅアイのような仮名が振られている。貿易現場では「さいふ」ではなく「つぁいふ」のような唐音語が流通していたのであろうか。『長崎方言集覧』「ツァイ、フウ　財副　筆者勘定役。唐船用語」。音注左側の「客山子几」は未考。

0291「総管」　沙代（そうだい）A：ソダイ、総代、　B：ソウダイ

総管山（つぉんくぁんさん）　A：ソウカンサン、総管さん　B：ソウクワンサン

音注右は「総代（惣代）」、左は「総管さん」であろう。『増補華夷通商考』「総管　船中諸事ヲ肝煎奉行スル者ナリ」。『訳官雑字簿』「総管　ソウダイ」、『南山考講記』「総管　ソウクハン」、『長崎歳時記』「財副　総管」。ところで、音注「総」字は他に例がないが、精母なので、0006「月　姿基」（つき）の「姿」、0044「夏　吶子」（なつ）の「子」、0714「五　一茲子」（いつつ）の「茲」などと同様、破擦音の日本語音に該当するはず。近世唐音資料でも「総」字にはツヲンのような仮名が振られている。貿易現場では「そうくぁん」ではなく「つぉんくぁん」のような唐音語が流通してい

たのであろうか。『長崎方言集覧』「ツォンクワン　総管　ツヲン、クハン、ツン、クワン。一船の諸用を司る者。唐船用語」。

0292「夥長」火焦山（ほいちょうさん）　A：ホチョサン、夥長さん　B：ホチョサン　《駒上：火＞大》
『増補華夷通商考』「夥長　海上ノ乗方ヲ主ドル者也羅經ノ法ヲ能知テ日月星ヲ計リ天氣ヲ考ヘ地理ヲ察スル役ナリ」、『南山考講記』「夥長　ハリノヤク」、『長崎古今集覧』「夥長　ホイチョウ」、『長崎方言集覧』「ホヲチャン　夥長　按針役。唐船用語。」「ホイチョウ　夥長を訛りてホイチョウと称したものである」。

0293「舵工」代工山（たいこんさん）　A：ダコンサン　B：ダコンサン
『増補華夷通商考』「舵工　舵ノ役ナリ夥長ト心ヲ合セ風ヲ辨シ涛ヲ凌グ大事ノ役ナリ」、『南山考講記』「舵工　カヂトリ」、『両国訳通』「舵工　タイコン　カヂトリ」、『訳官雑字簿』「舵工艙　タイコンコウリ」。

0294「管公厮」揩其山（■）　A：●　B：●サン　《駒上：厮＞厠、其山＞斯（山ナシ）》
見出し語は未確認。音注「揩其」は0408「柿　揩其」（かき）と同じだが、「かきさん」なる語も検討がつかない。

0295「総捕」花焦山（■）　A：●　B：ホチョサン
校本Bの0292「夥長　火焦山」への覚え書きに
「295の音注は「花焦山」。ともに「夥長さん」。」
とあるが、総捕と夥長は別の役職である。『唐商売往来』「総捕ハ飯炊也」、『怯里馬赤』「総歩　船ノメシタキ」、『訳官雑字簿』「総部　メシタキ　食物ノコトヲ主ル」、『長崎古今集覧』「総哺　炊飯賄役」。未考。

0296「小工厮」晒婆羅同（さぶろどん）　A：●　B：サブロドン　《駒上：厮＞厠》
見出し語「小工」は未熟で一人前になっていない助手の意。「小厮」は召し使い・小僧の意。0260「小厮　沙婆羅」（さぶろう）の項参照。

0297「尊駕」馬斯（■）　A：●　B：バス
校本B「覚え書き」に
「音注「馬斯」は何と解読すべきか。簡要には該当する語が存しないが、今仮りに外来語と見て「バス（bus）」は如何。645櫂椅　厖古（簡要417）「バンコ」（banco）のごとくオランダ語からのものはあるが、英語からのものは他に例がないのが弱点。」

とある。日本初の路線バスは明治三六年（一九〇三年）、バスの語源であるラテン語 Omni-bus の語が、フランスのナント郊外において初めて乗合路線馬車と結びついたのも一八二二年のことというから、いずれにせよ『吾妻鏡補』成立後である。ここは人物類であり、以下に別人・我・你・他といった語がつづくのであるから、この尊駕は敬称の二人称代名詞であろう。『中文大辞典』第十冊「尊駕」の項「本謂天子之車乗。転為天子之敬称。今用為普通之敬称…」。もっとも、この音注についてはやはりよくわからない。あるいは「馬」字を「烏」字の誤写と見て「うし（大人）」か。

0282「街官　烏多那」（おとな）《駒上：烏∨馬》、0812「洗　亞拉烏」（あらう）《駒上：烏∨馬》、0206「老　老擠／烏司學里」（ろうじん／【烏→篤】としより）の異同例など参照。

0298「別人」別志人（べつじん）　A：ベツジン　B：ベツジン

0299「我」娃搭古施（わたくし）　A：ワタクシ　B：ワタクシ

0300「你」紅毛滛（おまえ～おまい）　A：オマヨ　B：オマヨ

0229「平輩」の項参照。

0301「他」挨拿勿多（あのひと～あのふと）　A：アノヒト、あの人　B：アノヒト　《駒上：他∨地》

見出し語は三人称の代名詞。音注「挨拿」は「あの」、「勿多」は「人」でまちがいないないが、音注「勿」字は物韻微母で、0610「盖碗　勿搭茶碗」（ふたちゃわん）、0886「両様的　勿搭一六」（ふたいろ）のような例からすると、「ひと」ではなく「ふと」の可能性が高い。『長崎県方言辞典』「あのふと　あの方。あの人の音変化。西彼杵―野母崎」「ふと　ひと。人。長崎市（稀）。西彼杵―崎戸」。ただし、他の「～ひと」の例を見ると0223「忠厚　也非多」（えーひと）、0265「読書人　揩谷蒙司六非多　がくもんするひと）、0152「無心人　夫几里捺非多」（ふぎりなひと）のようにいずれも「非多」で表記しており、これは「ひと」であろう。0039「東　非夾施」（ひがし）、0096「日中　非六」（ひる）、0309「鴨　挨非羅」（あひる）等々。